東海女子大学紀要，15，1995

当代への文学対応

原田　純

情念の空恐ろしさに迫り、欲望のすさまじさを描くのは優れて文学行為である。同時に、流動する当代に反応し、意味を告げるのも文学の仕事である。

17世紀イギリス革命を生きた二人の詩人、英文学に名を残すアンドルー・マーヴェルと世界文学に名を留めるジョン・ミルトンは、それぞれの仕方で務めを果たした。本稿はその発掘である。

1

1650年５月26日、イギリス支配層百年の野望アイルランド征服を、わずか９ヵ月と15日で成し遂げたオリバー・クロムウエルを迎え、ロンドンは沸いた。クロムウエルとは敵対の保守系マーキュリアス・ポリテイクス紙でさえ、世論として「過去、現在を通じて最も賢明で最も完全な指導者」とたたえる。

自由系パーフェクト・ダイヤル紙は、クロムウエルの史上稀な大量殺戮を、ローマ法王を偶像崇拝するやからへの寛容など、期待する方がおかしいとして免罪し、この件を除けば、アイルランド人はすべてよく扱われたと美化する。イギリス下院議長ウイリアム・レンタルは、国会の歓迎式辞において「偉大にして不可思議な御業に働く、神の多いなる摂理を、神は御手としての彼によって成就された」と述べ、クロムウエルを公式に神格化する。[1]

全市熱狂の中でまだ無職無名、クロムウエルとは反対の立場にいたマーヴェルは、「アイルランドからのクロムウエル帰国に寄せるホラチウス風オウド」120行を書いた。それは次のように始まる：

世に出んと志たてた若者は
今いとしいミューズを捨てねばならぬ、
木陰でもの思わしく
歌うたうときではない、
今こそ本を塵にまかせ
さびついた剣に油引き、
広間の壁から
鎧を外すべきとき。（１－８）[2]

英雄に触発された若者の息吹が響いてくる。世間向け世辞ではない、はるかに個人内面の衝撃、新しい時代到来の抒情表出である。詩の中の若者は30歳になろうとするのに、まだしかるべく身をたてていないマーヴェルその人である。国王軍に参加し、投獄されたリチャード・ラヴレス等宮廷詩人サークルの中にいて、権門貴族のための哀悼歌や、のち有名になる「愛の定義」、「はにかむ人へ」などの求愛詩を書き、英国国教会牧師であった父の小遺産で何とか生活していた徒食遊民である。

その彼にいとしいミューズを捨てさせ、本を塵にまかせて、世に出ようとふるい起たせるのは、革命の大立者クロムウエル将軍である。才であれ、冨であれ、武であれ、個人の

力によって世に出ることのできる時代がやってきた。その体現をマーヴェルはクロムウエルに見ている。羊飼の身から武力によって古い世界を消滅し、新しい国家の統領となるクロムウエル。その人の華々しい凱旋に、彼は時代の転換と内を走る自己変容の二重の衝撃を受けている。

それから6ヶ月後の1651年1月、ロンドンを去ったマーヴェルは、ヨークシャ州ナンアプルトンの第3代男爵トマス・フエアファクス家にあって、令嬢メアリの外国語教師となる。ここで詩人としての評価を決定する「アプルトン・ハウス」と「庭」を書きあげる。当時フェアファクスは議会軍総司令官の地位をクロムウエルに渡していた。2年後マーヴェルはイートンにあって、名門ダトン家の令息ウイリアムのチューターとなる。少年はクロムウエルの四女フランシスと結婚する約束が両親の間でできていた。[3]この時期マーヴェルはクロムウエルに近ずこうと懸命であった。

1655年1月「護民官陛下のもと統治1周年を祝う歌」をクロムウエルに献上する。そして2年後ミルトンの推挙により、彼の助手としてクロムウエル政権ラテン語係となる。志をたててから7年、晴れてクロムウエル世界の一員となることができた。

この経過を見る時、人生の予感におどる内面を、詩の冒頭がいかに正確に伝えているかがわかる。アイルランド征服者クロムウエルを創出した新しい世界が、自分の人生実現の場である直感を、マーヴェルは詩行に刻む。それを追おう：

休み知らぬクロムウエルは
平穏の不名誉な術策に安むことできず、
命運かけた戦いにより
休み知らぬ自分の司運星を励まし、
育ててくれた雲をまず裂いてでる
三叉の稲妻のよう、
身内きり抜け
火の道開いた、
なぜなら（大なる勇気にとっては
競う仲間も争う相手も同じこと、
かかるものと結ぶは
敵対するよりひどい目にあう）。（9－20）

休み知らぬ司運星をさらに励ます休み知らぬ力、これがマーヴェルのクロムウエル像である。[4]閉じられた前近代の宮廷詩サークルの中で、あふれる才能にあぐんでいた彼は、何物をも突き破り、前進しか知らないクロムウエルに自分の未来を投影する。旧世界でうっ屈していた生のエネルギーが、先導モデルに出会って噴出する。クロムウエルが賛美の対象をこえて、自分の内なる形成力となる。この内部変容を通じて、革命独裁者崇拝のメカニズムが明らかにされる。以下必要な当代史を管見しよう。

クロムウエルは権力への道を、ケンブリッジ地区選出の下院議員から始める。チャールズ一世が11年ぶりにやむなく招集した議会である。この議会は以来クロムウエルによるクーデター、さらに解散させられながらも、1660年6月元の姿に戻り、チャールズ二世を迎えるため自主解散する。通算20年、長期議会と呼ばれる。

新参のオリバーが入ったとき、議会の多数派で主導権をとっていたのは、プロテスタントの長老派である。国王を首長とする国定宗教のイギリス国教会は、カトリック教会同様、司教が牧師を任命する階層組織である。これに対し、信徒によって直接選ばれた長老たちが教会運営をする新しい形態が、初めスコットランド、次いでイングランドで有力になる。現在スコットランドそしてアメリカで有力な長老教会（プレスビテリアン）がこれである。

宗教と政治が未分化な17世紀中期のこと、国教会と長老派の宗教対立は、同時に政治闘争であり、舞台はイギリス下院である。クロムウエルが所属する独立派は、中央教会が地方教区を支配する長老制度を認めず、各教区教会独立のより民主宗派であり、より左翼より先鋭な政治集団でもある。

貴族と司教からなる上院は保守の牙城であり、宗教は国教会、政治は国王派である。一方下院は多数の長老派とこれと共闘関係にある少数の独立派が支配していた。この中にあって、第二野党しかも陣笠のクロムウエルが、わずか2年の間に長老派を押さえ前面にでるのは、一に武力、二に政治力である。

1642年8月議会に抗し、兵をあげたチャールズ一世王党軍にたいし、議会軍はニューベリ、アドワルトン・ムアそしてラウンドウエイ・タウンと次つぎに敗れ、エッジヒルでも振るわない。だが一転、勝利を決定するのは、1644年7月マーストン・ムアの戦いである。勝因はクロムウエルが1年前郷里ハンチントンで組織し、敵将ルーパート王子（ドイツ選帝公プファルツァ領主フレデリック五世とイギリス国王チャールズ一世の妹でボヘミヤ領主エリザベスの子）により、鉄騎兵と恐れられた彼の連隊の働きである。

次に、クロムウエルは一地方連隊の長から全軍支配への野望を、政治手段によって実現する。彼のイニシアチブで1645年議会を通過する「軍職自粛令」は、国会議員ならびに貴族が軍隊将官を兼任することを禁ずる。無能な指揮官排除を目的とし、門閥によらず才幹によって人材を登用する近代人事考課の原型である。これによって議会軍大将エドワード・モンタギュ伯と総司令官ロバート・エセックス伯は辞職する。同時に議会は鉄騎兵団をモデルにして新型軍を編成し、トマス・フェアファクスを総司令官とする。議会が軍を統治するシビリアン・コントロールの創出である。

自粛令によれば、国会議員であるクロムウエルも当然該当する。しかし全軍会議とロンドン市の請願を受け、議会は例外として彼を副司令官に任命する。自ら議会に「自粛令」を提出した本人の深慮遠謀である。その4日後、彼の指揮によって議会軍は、国王軍をネエイズビーの戦いで壊滅する。これ以上革命が深化するのを恐れ、国王と交渉していた長老派のジョン・ハンプデンに代わって、クロムウエルが議会においても指導権を握る新しい局面となる。

その3年後の1645年12月彼の娘婿ヘンリー・アイアトン将軍配下のトマス・プライド大佐が、武力で長老派と王党派議員143名を排除する事件が起きる。41名逮捕、4名監禁、96名議会出席停止の処分である。3日後12月7日の議会出席は78名、14日は57名、24日は51名、実に4分の1に満たない。このため残余議会と呼ばれる。これさえクロムウエルは7年後の1652年強制解散させる。

プライド・パージの際、彼は国王軍鎮圧のためスコットランドにいて、計画を知らなかったことになっており、責任はアイアトンに帰せられた。急ぎロンドンに戻ったクロムウエルは「なされた以上それでよし」と、クーデタを是認する。[5]前の場合と同様、策謀家ならではの言動である。

独立派主導の残余議会は行政機関として、国事評議会を発足させる。議会投票により最高点となったクロムウエルが初代議長になる。だが評議会リストの中にアイアトンの名はない。理論の鋭さと戦略の確かさにおいては、実務型のクロムウエルに勝り、周囲から信頼されていた彼が選出されないのは、クーデターの責任を負わされたのであろう。1ヵ月後議会はアイルランド征服を決定する。先発のくじを引いた彼はリメリック包囲中熱病で死ぬ。不幸な人である。アイルランド戦争は多くの病死者をだしたことでも戦史に残っている。クロムウエルも海上で船酔いになり、ずっと健康が勝れなかった。しかし凱旋将軍として無事帰国する。マーヴェルの歌う司運星に恵まれていたというべきか。

ここで引用の詩行が明らかになる。「育ててくれた雲」とは、革命の口火をきり、クロムウエルの成長を用意する初期革命の母体、長老派である。この雲は裂かれる。「身内きり抜け」の身内はアイアトンと理解できよう。それゆえ結論として、「かかるもの」即ちクロムウエルと「結ぶは敵対するよりひどい目にあう」となる。

しかしこのように歌いながら、「かかるもの」に触発され、熱く燃えるマーヴェルは、英雄の非情を当然として、ザッハリッヒに記述する。当代の価値基準、倫理判断を越えてあるもの、これがマーヴェルの理解する英雄クロムウエルである。次を見よう：

ついで大気通して燃え
諸宮殿諸塔を裂いた、
そして月桂樹を貫き
国王の頭を砕いた、
怒れる天の炎に刃向かうも
とがめだてするも狂気のさた。(21－26)

当時の理解によれば、天の炎とは電雷即ちローマ神話の首神ジュピターである。宮廷詩サークルにいたマーヴェルが、チャールズ一世の処刑を、クロムウエル＝ジュピターの超人レベルのロジックで正当化するのは、革命英雄崇拝のメカニズムを知るうえに重要である。

百年にわたるイギリス絶対君主制の中で、国王を首長と仰ぐ国教会は、王権神受説を教義とし、全国教区牧師に一週一度説教するよう義務ずけていた。このことを見ても宗教と政治の未分化がわかる。とくにエリザベス女王死後宗教弾圧はひどくなり、スチュアート王朝ジェイムズ一世そしてチャールズ一世で耐えがたいものとる。メイフラウワー号によるピューリタンの新大陸への大量出国は、その一例である。この専制に抗し、イギリス革命が勝利する。国事評議会議長クロムウエルは、チャールズ一世の暴政と内乱の責任を裁く高等裁判所の設置を議会に提案する。そして裁判所によって一週間たらずのスピード審理のあと、チャールズは断頭台で公開処刑される。

問題は国民の中にいわば生得になっている国王信仰である。歴史家ドン・ウルフはいう「国王という名の魔力は、共和国政府によって容赦なく財産を没収された貴族はもとより、無学な平均的国民にとってもリアリティであり、クロムウエルのどんな武勲によっても消すことはできなかった」。[6]しかしマーヴェルはこのような国王聖別観にとらわれず、神聖国王と下賤の民草クロムウエルを逆転する。

月桂冠をいただくチャールズは地上の一国王、クロムウエルが天の炎ジュピターとなる。古来月桂冠は稲妻よけとされ、ローマ皇帝はいつでも月桂冠をつける権利を有していた。だがこのような月桂冠といえども、クロムウエルの天の炎には勝てない。チャールズは頭を砕かれる。国王神聖不可侵の神話を宮廷詩人マーヴェルは清算する。彼は歌う：

正義が運命に訴え
昔の権利を申し立てても無駄、
権利の通用いかんは
当事者の力次第、
自然は真空を忌むが
それ以上に重複を許さない、
だから席を明けねばならぬ
より力あるものが来るからには。(37－44)

国王信仰を抜けた冷徹な近代政治力学、力のマキャヴェリズムである。チャールズからオリバーへの権力交代は、「自然は重複を許さない」の法則によって当然とされる。革命の新局面に対するこの認識の中で、詩人自身が、正義や運命の伝統価値から「当事者の力」の信奉者に変容する。

この時クロムウエルの公式肩書は、全軍司令官ならびに相互対等 41名の国家評議会の一員である。当時の彼は「政府の最も有力な高官」と、記録されているにすぎない。[7]国王大權に比せられる何の称号もない。ウルフはいう「王制が消滅したところに生じた国民心理と政治空白、クロムウエルと僚友たちはこれを埋めようと空しく努力していた」。[8]

新大陸マサチューセッツ知事の経歴を持つ海軍大蔵卿サー・ヘンリー・ヴェインは、見識と人望では彼を抜いている。王処刑判決の高等裁判所の長を勤め、評議会第２代議長であるジョン・ブラッドショウ、それに大法官

バルトワド・ホワイトロックなど有力な評議会員は、必ずしも彼の同調者ではない。さらに議会は1649年１月、いかなるものであれ王となってはならないことを決議している。

ジョン・ランバート少将、ジョン・オーケー大佐、チャールズ・ウルジ少将らクロムウエルの僚友は、局面打開を狙って1652年議会解散の請願をする。だが議会は聞かない。ホワイトロックは「軍将官らによる剣の請願を許されるのは残念」と、彼に釘をさしている。[9]それはウルフのいうクロムウエルらの空しい努力の一例である。指摘すべきは、マーヴェルの詩にあっては、これより２年前の時点で、クロムウエルがイギリス国王チャールズ一世と交代している。詩は献上歌ではない。クロムウエルに取り入ろうとした世辞賛歌の類ではない。詩人の内面即応であり、抒情の自然表出である。それが事態に先行するものとなっている。現実に対する文学反応の先見性を示すものである。詩はさらに続く：

彼は慎みの質素な生活
王様梨（ベルガモット）の栽培がやっとの
人の知らない庭から、
休み知らぬ武勇によって
高く登ることができた、
時の大いなる業を壊し
古い王国を鎮圧し
別の型に変えるために。(29-36)

ベルガモットは当時大陸から移入された梨の種類で、トルコ原名は王の梨である。マーヴェルはこの名とそれが新種であることに意味を込める。すでに新種王様梨（ベルガモット）の栽培者であったその人こそ、新種王国の建設者にふさわしいと。自分と変わらない低階層、「人の知らない庭」からおどり出て、民衆の心をつかみ、ゆさぶる革命英雄への共感が脈打つ詩行である。マーヴェルは都市細民の英雄待望感の中で、天下の覇者クロムウエルの帝王未来を先取りする。まだ当人さえ口に出せない時点において。

クロムウエルの経歴は細民の夢をかき立てる。家は祖父の代に没落、父ロバートは年収300ポンドのつましいジェントリ（地方地主や新興企業主など有産階級の総称）。その子オリバーは18歳で父をなくし、ケンブリッジ大学には１年いただけで、故郷オクスフォド州ハートフォドに帰り、父のあとを継いで小地主となる。しかし５代前にさかのぼれば、ヘンリー八世に仕えた悲劇の名宰相トマス・クロムウエルを祖とし、祖父の代までは騎士称号を有し、近隣のモンタギュー伯（のちクロムウエルの自粛令により、議会軍大将を辞職させらる）、など有力貴族を親族とする家系である。

1629年29歳のときケンブリッジ州ハンチンドン・タウンから下院議員に選出され、同地の治安判事になる。しかし地方ボスのロバート・バーナードや市長らの政敵によって地位を失い、財産を処分してセント・イーヴズ・タウンに移る。隣のスピレ領主ヘンリー・ロレンスから土地を借り、羊を飼う。もはやジェントリはおろかフリーホルダー（自営農民）でもなく、コピーホルダー（借地農民）に等しい。一時期ニュウイングランド移住を考えたといわれる。[10]マーヴェルの「人の知らない庭」はこの時期をさしている。

1636年母方の叔父サー・トマス・スチュアートの遺産を継ぐ幸運に恵まれ、ケンブリッジ州イーリイ市に移った彼は、一躍財産家となり、ジェントリ身分に復する。1640年ハンチンドンから反国王、ピューリタン下院議員として再び選出される。中央政界に復帰したとき、彼は統治階級名門の誇り高い血統に加え、身をもってジェントリからコピーホルダーにいたる諸階層を体験した、幅広い政治家になっていた。

その彼の跳躍台は、1643年ハンチンドンの下層農民を組織した鉄騎兵団である。この常勝兵団は議会新型軍そして共和国軍隊の中核となる。こうして彼を頂点とする革命勢力が形成される。ヒルはいう「まとめていえることは、1648年権力を握った人々、チャールズ

一世処刑を行った人々は、イギリスの伝統支配階級よりはるか下の出身であった」。[11]

王処刑後の1649年初夏以後、公式称号いかんにかかわらず、クロムウエルは彼らに支えられ、新国家統一の求心力となる。内部につちかわれた国民大衆性、諸階層複合性は、アングロサクソン建国以来12世紀を通じ、いかなる国王も持ったことのない特性である。イギリス革命が生みだしたまったく新しい型の指導者である。

「古い王国を鋳直し、別の型に変えるために」と歌ったマーヴェルは、この点をついている。古い王国は古い王、別型の王国は別の人、歌っている詩人も歌われている当人も、全く同じことを考えている！

しかし別型の王とされたクロムウエルの国民大衆性については、アイルランド征服者である今、チェックされる必要がある。ここに彼の資産リストがある。[12]議会軍副司令官時期の年俸は1.905ポンド・プラス手当金。アイルランド司令官年俸は在イギリスでは3.650ポンド、アイルランド上陸後は8千ポンドをプラスされ、1万3千ポンド余となる。さらにつけ加えれば、早くも1641年の時点で将来性を見込み、アイルランド土地債券を購入して、潜在地主となり、9年後自ら征服に乗り出し植民王となる。英雄の知略というべきか、悪魔の狡智と呼ぶべきか。

ちなみにこの時マーヴェルの収入は父の小遺産からの年利子の40から80ポンド。これはイギリス人口の43.1パーセントを占める中・下層階級の中の下あたりである。年収20ポンド以下の極貧層が人口の50パーセント以上を占める時代である。一方、1.3パーセントの上流階級の下限は4百ポンドである。[13]クロムウエルがどれほど国民大衆から遠く離れてしまったかがわかる。

1年後の1651年秋のある日、セントジェイムズ公園を散歩中、彼がホワイトロックと交わした息づまる緊張の会話がある。政策決定の遅れや議員のスキャンダルなど、議会に対する国民の不満をあげたあと、クロムウエルはいう「誰かが思い切って王となったらどうだろう」。ホワイトロックは答える「そのような療法は病気より悪いものだ」。そしてつけ加える「もしきみが君主制が良いとお考えなら、その旨を控えめなチャールズ二世と交渉されるがよろしかろう」。クロムウエルはそれ以上話すのを止めた。[14]

秘めた野心とない混ぜにして、クロムウエルが提起するのは、古い君主と異なる国家統一者の現実課題である。国民大衆はまだ古い王国意識を抜けていない。だが国王は消えた。歴史急回転の中に生まれるこのすき間を埋めるのは誰か。

クロムウエルが漏らしたが、それ以上進めなかった課題にたいし、マーヴェルは早くも答を用意している：

これこそは力で得た権力が
始めて確かめられた記念のとき、
それはカピトルの丘が掘られ
現れた血の首に
工事者らが驚き走ったときのよう、
だが国家は見た
自らの幸の定めを。(65－72)

詩はローマ建国（紀元前853年）にさかのぼる。その年ジュピター神殿を築くために丘が掘られ、土から人の首が出る。それはこの地が全世界のカピタル(頭)、即ち首都であるとの神意と解された。だから「国家はこれに見た自らの幸の定めを」となる。

古代ローマ共和国が見た血の首を、今イギリス共和国は処刑されたチャールズ一世の血の首に見る。マーヴェルはこれを「幸の定め」の神意とする。こうしてローマの守護神は稲妻ジュピター、イギリスの守護神は天の炎クロムウエルの結論が導きだされる。

凱旋将軍に対するマーヴェルの反応は、相手の中に秘められている野望と自負への完全な呼応である。権力の中枢にあって、さらに聖別され頂点をめざす男と、権力からほど遠い無名の男が、共に「世に出ん」とする大志

の交響、これがこの歌のライトモチーフである。

マーヴェルの詩にはもう一つ見逃せない側面がある。次の詩行を見よう：

彼ら〔アイルランド人〕こそこの方の誉れを
最も請け合うことができる、
征服されて白状したのだ
いかに良い人正しい人か
最も信頼するに何とふさわしい人かと。
(77-80)

ここではマーヴェルは時流ジャーナリズムのクロムウエル賛美を出ない。アイルランドにおけるイギリス軍の蛮行は本国でも良く知られていた。なかでもドロゲタとウエクスフォドの残虐は今も戦史に残る。

1649年8月クロムウエルはアイルランド軍総司令官ジェイムズ・バトラー・オーモンド伯を追って、ダブリンから50キロ北のドロゲタを歩兵8千、騎兵4千の大軍で包囲し、守備隊長サー・アーサー・アストンに降伏を迫る。アイルランド側はわずか兵2千。しかし7年前エッジヒルでクロムウエルを悩ましたカトリック信者王党派のイギリス人アストンは、白旗の要求に対し赤旗で答える。

9月11日午後5時、クロムウエルは町の聖メアリ教会を攻撃目標にして、十一門の攻城砲をうちこむ。非戦闘員聖職者に対する不法残虐行為である。壁の穴から中に入った兵たちは、待ち受けていたアイルランド軍によって、多くの死者を出した上に、歩兵連隊長ジェイムズ・キャスム大佐が頭を撃たれて死ぬ。第一戦の思わぬ苦戦に激怒したクロムウエルは、相手側の降伏要求を寄せつけず、武器を持つものはもちろん、尼僧を含めすべての僧を殺す命令を出す。こうして市民を巻き込む大殺戮となった。

アイルランド側死者の正確な数は不明である。クロムウエルの議会報告では3千、従軍医ベイトソンによれば4千、公式発表は2千である。[15]この無差別大量殺戮はアイルランド軍を脅えさせ、ダンドークとトリムはすみやかに降伏する。ドロゲタの殺戮は戦術上功をそうしたのである。アイルランド征服を早く徹底的にしかも安くあげ、この成果によってより重きをなそうとするクロムウエルの高等戦略にそうものである。[16]一時の激怒に帰せられない深謀の戦術といえよう。

国事評議会議長ブラッドショウは彼に書き送る、「この残虐は多くの流血を防ぐものとなりましょう」。だが今日の歴史家はこのような正当化を許さない。R.S. ポールは、これは1945年8月広島と長崎の原子爆弾が日本軍の降伏を早めたとする、アメリカの強弁と同じとする。[17]

しかし当時のイギリス人は先の新聞例のようにこれを不問にし、クロムウエルを英雄として賞賛する。マーヴェルもこれに和し、征服者が「いかに良い人正しい人」とアイルランド人に「白状」させる詩をつくる。閉じられた古い世界の中で、しかるべき場を求めていたマーヴェルの志は、時代転換者出現を目のあたりにして噴出する。さしたる評価も無い29歳の都市細民は新時代体現者に向かってひたすらコミットする以外になかった。これが革命の魔術、英雄崇拝のマーヴェル版である。

クロムウエルに対するマーヴェルの英雄崇拝は、5年後の「護民官陛下のもと統治一周年を歌う」、さらに8年後の「オリバー・クロムウエルの死に寄せて」においても変わらない。クロムウエルの野望、それと連動する革命の裏切りに対する批判は見られない。彼の賛美はクロムウエル世界に場を求め、そして勝ち得た人間の人生展開の軌跡である。

2

マーヴェルの学識と人物を知り、1653年2月彼を評議会議長ブラッドショウに推薦するのは、共和国政府外国語長官ジョン・ミルトンである。世に出んと歌ったマーヴェルは、7年にしてクロムウエル世界の公式一員とな

る。その3年後完全失明のため、クロムウエルに対する失望を秘めながらミルトンは職を退き、マーヴェルがあとを継ぐ。

世に出る人と世を捨てる人に通いあう尊敬と信頼は終生続く。1662年12月、王処刑著作の科で、王制復古の議会により死刑判決に処せられたミルトンを救い、過剰な収監費に抗議するのはマーヴェルである。だが不幸にしてクロムウエルの評価は割れている。ミルトンのソネット「クロムウエル将軍へ－1652年6月福音普及委員会聖職者たちの提案に寄せて」を見よう：

クロムウエル　われらが民の頭領
戦いの雲ばかりかひどい悪口の雲を抜き、
信仰と類いない堅忍に導かれ
平和と心理への栄光の道きり進み、
王冠の傲慢な運命の首に
神の戦勝の旗たて神の業ひたすら、
さればダーウエン川はスコッツの血に染まり
ダンバーの野はお身の誉れに高くひびき
ウースター川は月桂樹の花環つける。
（1－8）[18]

ミルトンもクロムウエルを「民の頭領」と歌う。チャールズ二世はスコットランドの地でクロムウエルに敗れる。ソネットはスチュアート父子2代の反革命の挫折とスコットランド平定の祝賀である。クロムウエルはアイルランド征服ではマーヴェル、スコットランド戦勝ではミルトンと、当代を代表する2人の詩人によって歌われる栄誉に恵まれる。

しかしミルトンにとって、革命とはイギリスの地に新しいエルサレム、即ちイエス・キリストを精神国王とする新国家の建設である。クロムウエルに意味があるのは、ソネットの「神の業ひたすら」の信仰行動者である限りにおいてである。その限りにおいて「民の頭領」であるに過ぎない。

革命のために数多くの著書と論文を出し、宗教改革者としてまた共和主義理論家として、彼はすでに確立していた。大陸諸国と新しい関係に入ったイギリス共和国は有能なラテン語書記を必要とし、ブラッドショウは丁重な手紙を彼に書く。3日考えたあと、彼は革命の大義から承諾する。これでわかるように、マーヴェルと違って、彼はクロムウエルに触発され、世に出る必要はなかった。信念に従い、意志によって革命政府の公僕となった。マーヴェルがクロムウエルに対し、賛美無距離の関係にあるのに、ミルトンは批判距離をおいて見ることができる立場にある。ソネット後半セステットはこのミルトンの声が響く：

しかしまだ征服すべき多くのものが
残っている。平時の勝利は
戦いに劣らず誉れ高い。新しい敵が立ち
世俗の鎖でわれらの魂を縛ろうしている、
われらの自由なる良心を救われよ！
福音を食い物にしている雇われ狼の爪から。
（9－14）

ソネット前半で歌われているように、ウースターの勝利後共和国を武力で脅かす敵はいない。しかしその後の幾多の革命が例外無く示すように、内乱や戦争のあとの段階が革命の正念場である。ミルトンの歌う「平時の勝利は　戦いに劣らず誉れ高い」は、千金の重みを持っている。

では平和時の今になって現われた「新しい敵」とは何か。副題にある福音普及委員会の聖職者たちである。ジョン・オウエンら独立派牧師は、自派を国定宗教にすることならびに10分の1税継続を、国会に請願してそのための委員会を発足させる。メンバー40名、ここにクロムウエルも入る。

イギリス国教会もそれを追い出した長老派も、自派を国定教会とし自派の教義と礼拝形式を国民に強制し、10分の1税（10世紀中頃よりカトリック教会が行った、教区民から収入の10分の1をとる封建大衆収奪税）を強行した。イギリス革命が起こるべくして起きた理由の一つはこれであり、ミルトンが革命に

参加した理由の一つもこれである。

革命が勝利した今、自分が職にある政府がこれの復活を企んでいる。政府高官であるミルトンは、40から13人にしぼられた起草委員会に、クロムウエルがいることも知っている。委員会の立役者であるオウエンは、クロムウエル付き従軍牧師の身である。動かしているのは誰か、ミルトンが知らぬはずは無い。ソネットでは委員会にいる聖職者たちを「雇われ狼」として、かれらに非難の的をしぼり、クロムウエルには「助けられよ」と懇願の形をとる。表面に出ているオウエンより、背後にいるクロムウエルの方が本当は敵であるのに。この屈折表現ゆえにソネットの意味は深い。雇われ狼(hireling wolves)の hireling について、どのコメンタリも派生意味の〈慾得ずく〉を採用している。拙訳があえて第一義意味の〈雇われ者〉をとったのは、狼即ち独立派牧師たちの隠れた雇主を暗示できるからである。

ソネットが書かれたころ、クロムウエルは言っている「神の子が一人でも迫害される事態が避けられるなら、余は回教さえ許す用意がある」。自他ともに認める信教の自由の擁護者らしい彼の言葉である。大著『ミルトン伝』の著者ディヴィット・マッソンは言う、「以前と変わらないクロムウエルが委員会にいる以上、オウエンその他の提案がどんなものであれ、委員会が強権的なものに堕するはずは無いと、誰もが信じていた」。「誰も」の中にはミルトンも入っている。[19]マッソンは正しいであろうか

エディンバラ知事宛のクロムウエルの私信が残っている。ソネットより1年半前である。「不敬あるいは公安を乱す発言があれば、国家の長たるべきものは罰すべきである」。信教の自由を力で取締まることを当然とする権力者の弁である。ホワイトロックに自分の野心を仄めかして沈黙させられた頃である。クロムウエルの表裏二面を示している。それから半年後の1652年2月、独立派を国定教会にする動きが表面化する。この動きと彼の秘められた野心との連動を、ミルトンもマーヴェルも察知していたであろう。マーヴェルは当然肯定的に理解したであろう。だがミルトンはそうはいかない。

ソネット制作の頃、ミルトンはポーランド・プロテスタント文書『ラコビアン教義要項』の出版を許可したかどで、福音普及委員会によって問題とされ、1652年議会によって譴責される。いずれもクロムウエル臨席の場である。この時期水平派急進将校たちは、10分の1税廃止、選挙法の改正、議会の解散、新選挙を要求し、軍総司令官であるクロムウエルに宣言文を手渡す。しかし彼はこれに署名せず、逆に指導者ジョン・リルバーンを大陸に追放する。彼は共和理念においてはミルトンの先を行く先駆的民主主義者である。すでにこの時期、クロムウエルが革命を鎮圧する側に廻っていることがわかる。彼はジェントリ有産階級の利益のための革命家であり、それ以上の革命深化を許さない。

これについて一例をあげよう。アイルランド征服時における彼の財産作りは上で述べたが、現地司令官として最も気を使ったのは戦費調達であった。彼もメンバーである議会の対アイルランド委員会は、旧王室農地地代を担保に、ロンドン市から12万ポンドを借り入れる。結局返済に困り、王室農地並びに旧司教領売却費をロンドン市に渡す。議会は国税から40万ポンド、国債で15万ポンドを調達する。さらに追加され合計71万ポンドとなる。この金は勝利の暁には出資者、関係者に大きな利益となって戻る性質のものである。[20]ロンドン商工業組合の親方や地方大ジェントリ、即ちイギリス新興ブルジョアジーはアイルランド植民利得の夢を、クロムウエルに託したのである。

ドロゲダ、ウエクスフォド大殺戮後、勝利の見通しがついた1650年1月、クロムウエルは書いた。「諸君はお考えのことでしょう。現在イギリス政府は5百万ないし6百万ポンドの支払能力を有し、いくらでも買手はいます。買手はそのお陰で百万ポンドの4分の1強の

投資負担ですみますから」。[21]少なくとも20倍以上の利益が、アイルランド戦費出資者に保証できる自負が語られている。彼はブルジョア新支配層の期待に見事答えたのである。そして今独立教会の信仰者、共和国軍隊総司令官そして議員であり、国事評議会議長である彼は、富と地位において彼らのトップであり、彼らの希望の星となる。だがこの程度の平穏に安む彼ではない。マーヴェルの人物眼は確かである。

ではこの時期彼を支える独立派将校たちはどうであろう。勝利ごとに高給と土地を得、政府高官の地位を占め、ジェントリになる彼らはいずれも低階層出身である。プライド・パージのプライド大佐は荷馬車屋あるいはビール醸造雇われ人である。チャールズ一世逃亡地ワイト守備隊長ユーア大佐は召使、国王をウインザーに移す責任者ハリソン大佐は羊飼の小伜である。ジョン・オーケー大佐はローソク製造人、ジョン・ヒューソン中佐は靴屋である。彼らがどうなるか。一例をあげれば、8ないし10ポンドの極貧層にいたフィリップ・ジョーンズの年収は7千ポンドである。彼はプライド大佐とともに、1658年クロムウエルが設置する共和国別院（上院にあたる）の議員になる。即ち貴族待遇となる。このジョーンズの階級は大尉である。[22]それ以上の上級将官たちの栄達ぶりは推して知るべしである。ちなみに政府高官ミルトンの年俸はわずか288ポンドである。クロムウエルを頂点とするこれら一握りの独立派将校は、すでに大衆からも革命からも遠い。

この例によっても、クロムウエル政権の国民基盤が、いかに弱く不安定であるかがわかる。アイルランド総司令官に任命された1649年3月、クロムウエルはこの大事業を前に、自らの権力確保のため長老派との修復を図る一方、階級敵である水平派壊滅に乗り出す。3月28日『イングランドの新しい鎖』出版の科で、ジョン・リルバーン等指導者は捕らえられ、投獄される。その時彼らの釈放署名はたちまち1万人となり、ホワイト・ホールは女性を含む大群衆で囲まれる。[23]当時ロンドンの人口は30万人と推定されている。[24]名前も書けない文盲率は、ジェントリ層でも2パーセント、職人44、農民79、女性89の割である。[25]短期間に1万人の署名は、これら民衆数万余の重みをもって迫る。釈放運動はロンドンや軍隊だけでなく、地方にも波及する。イギリス革命は民衆の解放エネルギーを噴出させる。

同年4月サリーで土地共有共同耕作運動を始めたディッガーズ（真正水平派）を、クロムウエルは軍隊を使って追い払い、運動そのものを根絶する。次いでアイルランド派兵軍を利用し、軍隊内水平派の不満、反乱を挑発し、弾圧する。これに抗議する水平派を、5月バンベリ、次いでバーフォドで奇襲により鎮圧する。指導者らはその場で射殺の見せしめ強硬手段であった。彼らの鎮圧はイギリス支配層全体の共通利益である。勝利して帰るクロムウエルとフェアファクスに、オクスフォド大学は名誉博士号を贈り、ロンドン市会は歓迎の宴を張る。イギリスにブルジョア体制を確立する革命事業、その限りにおいてクロムウエルは彼らにとって必要であり、英雄であるにすぎない。

これらの弾圧事件はまだ記憶から消えていない。それ故もし水平派の主張する新選挙をすれば、どうなるかは誰の目にも明らかである。革命に期待した大衆の失望と憤まん、追われた長老派と王党派の恨み、王処刑への怒り等々、常勝英雄クロムウエルでさえ、新しい選挙では当選するかどうか心配で、占星師を呼んでいる始末である。[26]

だから自派を国定宗教にし、自派牧師を国家宗教官吏として全国教区民の意識を支配する必要に駆られる。宗教と政治が未分化な時代にあっては、この種の宗教イデオロギー支配が有効な統治手段である。クロムウエルが福音普及委員会を設置し、草案を急ぐ理由はここにある。

一方ミルトンにとっては、自分の受けた処罰を含め、委員会はこれまでの革命の成果を

崩すものであり、座視することはできない。こうして意を決し、彼は起草委員会の実際の中心人物であり、自分の主人である人にソネットを書き送る。それにしてもすでに野望へと走り出してしまった人間を止めることの不可能を、ミルトンであればわかっていたであろう。ではなぜあえてこのようなことをするのか。クロムウエル宛より2ヵ月前の8月、彼がサー・ヘンリー・ヴェインに送ったソネットを見よう。その後半部はこうである：

その上宗教と政治の力それぞれの意味
それぞれの区別は何か知るものは少ない、
お身は学び知っておられる、
われらはお身に負う両者の剣の領域を、
されば平和の今宗教が頼るは　お身の
確かな手そして認めるお身こそわが嫡子と。
(9－14)

政治と宗教の分離は近代国家の指標である。スチュアート王朝を倒し、国教会を解体したイギリス革命の中で、ミルトンはいち早くこの問題を提起する。革命の主体であった長老派も、そしてこれを倒した独立派もこのことを学んでいない。革命指導者と自他ともに認めるクロムウエルも同じである。この人物と対比させる形で、ミルトンはヴェインを歌う「お身は学び知っておられる」。そして結論する「宗教が頼るはお身の確かな手そして認めるお身こそわが嫡子と」。

ヴェインの前歴については前に触れたが、クロムウエルも一目おく有力な国事評議会メンバーであり、1年前の1651年6－7月4週間評議会議長を務めた革命の長老である。そしてミルトンさえ認めようとしないカトリックを寛容せよと主張する、真の意味における良心の自由の擁護者である。だがこの勝れた近代性、当時にあっては余りの急進性のゆえに、福音普及委員会に有効に対処できる現実政治家ではない。現に進行している良心の抑圧を意図する委員会に対し、本来であれば、ミルトンは誰をおいてもヴェィンを頼みにし、助けを求めるであろう。クロムウエル宛ソネットから2ヵ月後のこの時期、事態はさらに悪化しているのに、自ら宗教の嫡子とたたえるヴェインには、ミントンは行動要請の意思表示を一切しない。政治課題では期待できないからであろうか。ミルトンの賞賛は苦渋に満ちている。

見識と人物において全面的に尊敬し、信頼している相手には賞賛のみ。野心と行動について批判し、絶望している相手には「助けられよ」とするミルトン。懇願の実現をほとんど期待しない懇願である。ヴェイン宛ソネットが真情の表出であるのに対し、クロムウエル宛は屈折心理の表出である。表現レベルの背後には失望と不信があり、スタイルは高度にレトリカルである。もしレトリックが文飾という近代意味ではなく、相手を説得する術という古典定義であれば、クロムウエル宛ソネットは絶望のレトリックといえよう。

クロムウエル政権に職を奉ずる一役人ジョン・ミルトンの主人への対応は、専制君主に仕える廷臣同様口に出せない真意を、行間ににじませる苦心の諫言と同パタンである。近代社会を生みだすブルジョア革命の中にあって、革命続行のために反革命の新しい敵に仕えなければならなかった、勝れて近代人であるミルトンの前近代スタンス。ソネットの意味はここにある。

繰り返すけれども、ミルトンは世に出ようとクロムウエルに近ずく必要はなかった。学者そして革命理論家としてすでに確立していた。公証人であった父の遺産で生活できた彼は他人に金を貸し、1年1ヵ月大陸旅行をし、ガリレオらと会見できる身分である。いつでも職を辞することのできる彼が、失明の中で政務に励むのはひとえに革命の大義への献身である。

ソネット1年後、クロムウエルが残余議会を解散したとき、これに抗議して辞職した人々の中には、ミルトンを招いたブラッドショウや「宗教の嫡子」ヴェインもいた。それでも彼は踏み留まった。天上の反逆者大天使

ルーシファが最初に生み出し、人間原罪の元凶となる野心に生きるクロムウエルの加速度を、誰かがフレーキとなり、たとえ止めることはできないにせよ、空しくともブレーキが政府部内にあることを、地上のこの悪魔本人、自分の主人に知らせなければならない。

クロムウエルに対するミルトンの対応は屈折の悲憤である。現れかたは賞賛と懇願であり、奥によどむのは失望と怒りである。ソネットを読んだであろうクロムウエルは、そこに何を感じたか。何がしかの思いはあったであろう。しかし何も変わらず彼の既定方針どうり事態は進んでいった。

2ヵ月後の1653年7月、オウエンやトマス・ハリソン大佐らの推薦で選ばれた140名からなる指名議会（ベアボン議会）が発足する。5ヵ月後の12月議会は閉会宣言し、自分たちの身分をクロムウエルに委ねる。これが彼によって仕組まれたかどうかは、プライド・パージ並びに福音普及委員会の場合と同様記録にはない。しかし彼が直ちに受け入れるのは前と同じである。新憲法「インストルメント・オブ・ガバメント」が発布され、12月16日クロムウエルは、イギリス護民官と宣言される。この時ハリソン大将やナタリエル・リッチ大佐ら、残余議会解散後さらに先細るクロムウエル政権を支えた人たちが、彼を見限る。1656年8月ヴェインは反護民官文書の科でワイト島に幽閉される。[27]

1657年5月第2次護民官議会採択の「卑下請願と忠言」は第11条において、彼を事実上国王とする。しかしプライドを含む下層出身将校連名抗議によって、国王称号辞退に追いこまれが、後継者指名権、上院（別名別院）の設置、議員指名権及び貴族創出権は受け入れる。事実上クロムウエル王朝の成立である。しかし後継者指名をはっきりしないまま、また国王の名を残さないまま、1658年5月23日極度の衰弱で死ぬ。59歳。画竜点晴を欠いた自画像を残して。

その結果はどうか。彼の野心とは裏腹に、国王期待の国民心理はスチュアート王朝復活へと止めどもなく進む。国王をいただくなら、クロムウエルより「控えめのチャールズ二世」といったホワイトロックは正しい。クロムウエルは思ってもいなかった結果を、彼自身で用意し招くことになる。

その意味において、彼は誰よりも革命の裏切者であり、イギリスに新エルサレムを築こうとした神への反逆者である。ミルトンは1653年クロムウエルの残余議会解散から1659年5月残余議会復活までを「短いけれど恥ずべき夜」と呼ぶ。[28]クロムウエルは夜の王、即ち悪魔サタンである。

此の頃から書き始められる叙事詩『楽園喪失』[29]に登場する神の敵対者サタンは、つねに自分が意図したこととは逆の結果を招くよう、天においても楽園においても、魔力のすべてをつくす。天上で天使軍3分の1を神からだまし取った成功は、地上楽園において人間の創造というもっと不幸な事態の原因となる。次に、イブとアダムをだました勝利は、神の子がイエス・キリストとなって地上に生まれる大敗北を招く。

悲憤と苦悩のクロムウエル体験なくしてこのサタン形象は創出されない。サタンの言葉がレトリックの宝庫であるのは良く知られている。ミルトンにとってソネット制作時期は、実に来るべき不滅の叙事詩の文学修行期間であった。

3

ミルトンのソネットはマーヴェルのオードに比べれば、一読たしかに心に迫らない。だがやむにやまれない批判と臣従卑下の制作過程を知れば、あえて歌われていない行間の黙示意味がわかり、屈折抒情の悲痛が心を打つ。凱旋将軍クロムウエルの英姿に触発され、世に出んと心おどるマーヴェル。絶望の距離から腰をかがめ、表裏二枚舌の歌をうたうミルトン。2人の詩人の当代への文学対応が教えてくれるのは、

1．かれらの作品の意味は、当代の脈絡から明らかにされる。そして明らかにされた意味が、今度は当代のより深い動向を照射する。これが文学の社会有効価値である。

2．矛盾を感じなかったマーヴェルはその時期をピークに、やがて抒情を涸らしサタイアに転ずる。クロムウエル賛美に参じた詩人ジョン・ドライデンやエドマンド・ウオラーも同じ文学宿命をたどる。一方、矛盾を生きたミルトンは、クロムウエルによる新エルサレム瓦壊の当代史体験を、サタンによる楽園破壊の創世記神話に浸すことにより、叙情詩の制作モチーフをつかみ始める。偉大な文学の創出条件は当代事象への根源批判である。

〔注〕

1　Antonia Fraser, Cromwell Our Chief of Man (Panther, 1977), p.356.

2　底本は The Poems and Lettes of Andrew Marvell, ed. H. M. Margoliouth (Oxford Clarenden Press, 1971), vol. I. 参照はほかに Andrew Marvell: The Complet Poems, ed. Elizabeth S. Donno (Penguin Books, 1981); The Complete Poems of Andrew Marvell, ed. Alexander B. Grosart (printed for private circulation, 1872, rep. AMS, 1966), vol. I; 吉村　伸夫訳『マーヴェル詩集－英語詩全訳』山口書店、1989。ただし本稿ではすべて拙訳。吉村氏はわが国で最も優れたマーヴェル研究家であり、『マーヴェル書簡集－王政復古時代イングランドへの窓として』(松柏社, 1995)の大業もある。

3　Michael Craze, The Life and Lirycs of Andrew Marvell (Macmillan, 1979); John Kenyon, "Andrew Marvell: Life and Times", Essays on Tercentennery of His Death, ed. R. L. Brett (Oxford Univ. Press, 1979) 参照。

4　Christopher Hill, God's Englishman: Oliver Cromwell and the English Revolution (Dial Press, 1970), p.101. クロムウエルの運については、記録されない隠された計略によるのか、あるいは歴史遇然であるのか、決めかねる要素がある。Cf. Op. cit. 策謀家クロムウエル像の代表は、当代の王党派で『反乱の真の歴史記述』(1702-04第1版）の著者エドワード・クラレンドンであり、19世紀半ばまで続いた。1845年トマス・カライル編『オリバー・クロムウエルの書簡集ならびに演説集』から歴史実証主義の方法が確立され、同時にクロムウエル英雄像ができる。20世紀になって、クロムウエルの血を引くサミエル・ガーデナーの『歴史におけるクロムウエルの位置』(1902) はこれを継ぎ、今日のより精緻な研究の基礎となる。信仰者革命英雄像は、かっての内乱観念を清算しピューリタン革命の規定において作られた。しかし今日ではブルジョア体制への変革としてのイギリス革命の新概念の中で、英雄像は批判され、消えている。前掲のヒルはその代表者である。

5　Hill, p.101.

6　Complete Prose Works of John Milton, ed. Don M. Wolfe (Yale Univ. Press, 1956-80), vol.IV, 185. 以下 Wolfe と略す。

7　Fraser, p.391.

8　Wolfe, 185.

9　Fraser, p.410.

10　Hill, p.46.

11　Ibid., p.102.

12　Ibid., p.196.; Fraser, p.320.

13　Theodre K. Rabb, "Population, Economy and Society in Milton's England", The Age of Milton: Background to Seventeeth-Century Literatur, ed. C. A. Patrides and R. B. Waddington (Manchester Univ. Press, 1980), 92.

14　Fraser, pp.411, 422.

15　Ibid., p.338.

16　Hill, p.114.

17　Cf. Ibid., p.117.

18　Milton's Sonnets, ed. E. A. J. Honigmann (St Martin's, 1966).

19　David Masson, The life of John Milton (Peter Smith, 1877 rep. 1965) vol.IV, 394, 567.

20　Fraser, pp.300, 283.

21　Hill, p.119.

22　*Ibid.*, pp.101-102; The Good Old Cause: Extracts from Contemporary Sources, ed. Christopher Hill and Edmund Dell (Frank, 1969), p.446.

23　Fraser, p.310.

24 Rabb, p.86.

25 David Cressy , "Lavels of Illiteracy in England 1530-1730", Literacy and Social Development in the West : A Reader, ed. S.P. Harvey and J. Graff, 108.

26 Hill, God's Englishiman, p.134.

27 革命路線をめぐるクロムウエルとミルトンの壮大な対立は、クロムウエル亡き後、ハル市選挙区内のヴェイン対マーヴェルの抗争に矮小化される。クロムウエルの子リチャードの第2次護民官議会には、ヴェインを斥けマーヴェルがハル区からでる。これが解散され、復活された残余議会には代わってヴェインがでる。革命後退期にはマーヴェル、高揚期にはヴェインの図式である。王制復古後の騎士議会にマーヴェルは240票、第2位ででる。一方ヴェインはこの議会で国家反逆者として処刑される。この時ミルトンを救うのは騎士議員マーヴェルである。

28 Wolfe, vol.Ⅶ, 274 ; Cf. William B. Hunter's note, op. cit.

29 1658年11月頃と推定されている。See William R . Parker , Milton: A Biography (Oxford Clarendon Press, 1968), vol. I , 509.

summary

We may well say that, compared with Marvell's Ode , Milton's Cromwell sonnet seems to be short of penetrating deep into our mind. When, however, we understand the ambivalent process of making the sonnet through the actual context of his silent criticism against and obedient though unwilling loyality to Cromwell as his supreme master of the revolutionary regime, the heart aching of his grief will come up out of the inner lines of the poem. And the opressed lyricism of his mind will strike us with the signification of his high-minded way of living in the turbulent age. The primary meaning of the poem is explicated through the contextual research of the age in which a poet lived. This meaning is a value that a literary study contributes to understand correlalives of men and the politico-social stratum which we have to live through.